

## いまを生きる友禅染

「染工房」高橋欣也さん

高度な絵画的表現力、化学的かつ緻密な技法、いくつにもわたる工程。友禅染は、世界に類を見ない日本独自の芸術文化のひとつだ。しかし多くの芸術文化同様、友禅染もまた、伝統を残す困難にも直面している。友禅を現代に活き活きと伝える染工房、株式会社高橋徳を、京都に訪ねた。

### PROFILE

染工房 株式会社 高橋徳

取締役 高橋欣也(たかはしきんや)

明治32年、初代徳治郎が創業。明治41年以来、約100年にわたり、室町筋の老舗「染めの千總」(創業弘治元年)と取引を行なう。今日では着物はもちろん、世界に誇る染色技術である「友禅染」を駆使して一流ファッションデザイナーのドレス・ジーンズ等をはじめ、著名アーティストのコンピューターグラフィックスの絵画から掛け軸や屏風等を製作する。今回の取材相手である取締役、高橋欣也さんは家族・職人とともに、友禅染の伝統と技術を現代に伝えている。

### WEB

染工房 株式会社 高橋徳

<http://www.takahashitoku.com/>

## 京都と工房と職人と。全工程を手がけて質を高め続ける。

「まさか自分がGパンを染めてはくようになるとは思いませんでした」

高橋欣也さんは笑う。100年にわたって友禪染を生業とする家に生まれた。着物離れが進む今、友禪染を後世に残す望ましい形を模索している。

友禪染は、そもそも工程別に分業で染められていた。初代が創業した当時は、同じ学区内に住む6割が友禪染に携わっていたという。

「昔は町内を一周すれば、友禪染ができる過程がわかったものです。今は京都の人ですら、わからなくなった。友禪染を本当に知っていただきたいですね」と高橋さんは言う。

高橋さんの工房では、施設を完備してほとんどの工程を内部で行なっている。今回の取材では、その工程の大部分を見せてくれた。図案や下絵を描く職人さんは、小さな花、葉、枝を、フリーハンドで精緻に描いていく。ものの形を体が記憶しているのだ。何千枚も写生を行なうことで、こうした能力が培われていく。

一人前の職人になるまでは、15年近くかかるそうだ。高橋さんいわく「この仕事は天狗になったら終わり」だし、「大学で美術を学んで自分のスタイルがすでにある人よりも、無垢の人の方が向いている」とのこと。

友禪のキーワードは“肉厚”だという。

「糸がじゃぼっと染まると仕上がりが薄っぺらく見えて、安手のプリント地と変わらなくなってしまう。糸の半分くらいまでに染まると、表面に色がのって厚みが出て、発色がよくなるんです」

肉厚に染めるために、多くの決断と作業が重ねられる。糸、生地、染料などの性質を見極め、多くの技法から適切なものを選ぶ。そこでは職人の経験値が大きくものを言う。

## 水洗いや地入れまで。一通りの工程を修業する。

高橋さんは水洗いの作業を、自らデモンストレーションしてくれた。手のひらと甲を交互に返しながら、鮮やかな手捌きで生地を洗う。

「うちは社長をはじめ全員が、一通りのことを修業して好き嫌いなくこなします。その中で得意分野ができてのびるんです。基礎になるのは、水洗いや地入れなど、世間が軽視する地味な作業です。テニスだって、隠れた努力があってこそ、派手なプレーが可能になる。

水洗いは、色んな素材を手の感触で覚える大事な工程です」

きれいに染まるか、スレがいきやすいか、この作業を通じてつかんでいく。この工程は業者を外注する工房も多い。

全工程を一貫して請け負うからこそ、例えば緊急を要する舞台衣装など、難しいオートクチュールの注文もしばしば飛び込んでくる。「どんなに経験を積み、計算を重ねた上での判断でも、思いがけない結果が出てしまうのが友禪」と高橋さん。でもそうした難題をいかに解決するかを、挑戦として楽しんでいるようだ。

## 染めの楽しみを人々に、体験教室で友禪染を知ってもらう。

高橋さんの工房では6年ほど前より、「本格的な友禪染のおいしいところだけを手軽に体験できる」教室を毎週開いている。

「色合わせや地入れのやり方ひとつで、いかようにも染まります。素人の方でも、ムラがなく肉厚に染まるよう細かく計算して作ってあります」というコースは、次のようなものだ。

あらかじめ下絵、糊置き、伏せ、地染めされた生地には京友禪の図柄が施されている。

受講者は絵筆を持って、鮮やかな染料で染める。挿友禪された生地は、その後、蒸し、水元、ゴム水洗、湯のし、印金を施して、受講者のもとへ送られる。

「自分で染めてみたい」と、全国からたくさん

の参加者があるそうだ。時には参加者の少ないこともあるが、「友禪染を体験してみたい方が一人でも来るとおっしゃったら、やらせていただきます」と高橋さんは言い切る。「京都に遊びに来がてら参加して、自分だけの京都を発見して、喜んで帰られますよ」

昨今は和物がブームだが、一流の物にふれ、工房の現場を見る機会是一般の人にはほとんどない。「安いものを作れ」と言われるために、作る側にも手抜きが起きる悪循環も、業界では見られる。「昔は“自分の妻や娘のものを作るつもりで”と言われたのですよ」と高橋さん。

「よい仕事をする職人さんが、それなりによい生活ができるようにしないといけないと思います」

この状況を変えていくには、着物を着る機会が激減した日本人自身に、日本の伝統をいかに啓蒙するかが重要だ。

## デザイナーと技法のコラボ。新しい出会いが歴史をつくる。

高橋さんの工房では、千總グループ株式会社あーとにしまらを通じて山本耀司氏のコレクション用の作品を手がけている。Yoji Yamamotoといえば、黒だ。

「生地というのはどうしても柄やデザインに目がいきやすいですが、発色の違いなどで、同じ黒でも高敏感のあるものも安っぽいものもあるんです」と高橋さん。さまざまな染料を試し、5回の工程を経てやっと出現した漆黒は、

どんなに経験を積み、  
計算を重ねた上での判断でも、  
思いがけない結果が出てしまうのが友禪



黒にこだわり続ける山本耀司氏に「初めて肉厚の黒を友禪で見た」と言わしめた。また友禪染を施した同ブランドのデニムも、大変な人気を博したようだ。

「“肉厚に”というリクエストと、“いい技術を残したい”という気持ちが巡りあえたんです。そういう土俵を与えられたことに感謝しています」と語る高橋さんはうれしそうだ。

日本を代表するコンテンポラリーデザイナーと、日本を代表する染め技術のコラボレーション。それは300年前、新しい技法と、扇絵師・宮崎友禪齋が出会った友禪染の由来を思わせる。

江戸時代、鹿子絞りや刺繍などの贅沢品を禁止する奢侈(庶民贅沢)禁止令を、徳川幕府が発令した。限られた中でお洒落をしよう、という商人や職人たちの気骨から生まれた染。その図案として着物に取り入れられたのが、扇絵師で評判だった宮崎友禪齋のデザインで、これが全国に友禪染として広まった。

友禪染はそれまで絞りや刺繍、箔などの模様が主体だった染めの世界を、微細で絵画的な表現に満ちた、豊かなものに塗りかえた。

### 友禪染の装い。 伝統と技術が続く道を開く。

高橋さんは「女性がはおった時に、幸せな気持ちになる着物を作らなければならない」と信じている。難易度の高い技術を駆使した着物は素晴らしいが、職人がひとりよがりになって着る人の気持ちを置き去りにしては、本末転倒だと考える。

高橋徳の社長夫人である郁子さんが、自身でデザインした着物を見せてくれた。

「たいそうな着物ではなく、パーティなどで着られるドレス感覚なんですよ」と語るその着物の数々は、デザインは極めて個性的でありながら、年齢や体型に関わらず、着る人の内面までを見事に引き出して伝える。海外からの来客も脱ぎたがらないほど、また

人々に受け入れられてこそ、  
伝統も技術も残っていきます。  
受け入れられるものとは何か、  
それをいつも考えています



天然染料に加え、明治時代に使いやすい合成染料が登場して、型友禪が全国に広まった。絵皿に数種の染料を混ぜ合わせて、色を作っていく。



生地に残った染着していない染料や薬剤、糊料を洗い落とす。この水洗いがよくできていないと、染めや生地に不具合が出る。



## 高橋徳 手描友禅染教室

### 〈京友禅入門 体験コース〉

京友禅の優雅な「ぬり絵」を楽しみ、本物の京友禅の美しいところだけ体験できる。

#### ○古典柄と四季草花の小袱紗 挿友禅 体験

毎週水・金・土・日曜日開講。

受講料12,000円

日曜日のお弁当付のコースあり  
15,675円

#### ○京の五節句挿友禅

水・金・土・日曜日開講。

受講料12,000~15,000円

#### ○印金教室

2007年10月17日・24日・31日・11月7日

計4回のみ開講。

受講料10,000円

#### ○ぶどう染め友禅ショール教室

2007年9月16日(日)

挿友禅とぶどうの皮の色素でスカーフを染め、ワインとオードブルも楽しむ一度だけの特別コース。

受講料18,000円(税別)



「波に千鳥」帯

「琳派波」の夏物の訪問着に締める染め帯。「ゆかた感覚で気楽に着られる半巾の可愛い帯を染めてみました」と高橋さん。



「琳派波」変り絹 訪問着

白い糸目が見えない堰出し友禅。非常に高い技術がいる逸品。



「奄美風情」訪問着

奄美の杜を真糊とゴム糊とに分け、花のシャープさと葉の柔らかさの対比を表現。



「花輪違い文」野々村仁清作の器から取材

漆箔をあしらって陶器の質感を醸し出した染め帯。

着物であることを忘れるほど、装いとしての説得力を持っているのだ。袖を通してみた人はみんな、「友禅染は装うものではなく鑑賞するもの」という感覚がすっかり覆されて、「私も欲しい」「自分も着たい」と口にするそうだ。

大正時代に始まり戦後の貧困の中でも歯をくいしばって、技術を残すために先代が心血を注いで製作した、30幅の友禅染掛軸。それを見ながら、高橋さんはこう語った。

「自分たちの作るものは、決して民芸になって

はいけないし、ただ和を洋に移しただけでもいけない。人々に受け入れられてこそ、伝統も技術も残っていきます。受け入れられるものとは何か、それをいつも考えています」

Text by : スマキ ミカ

にっぽんきち

# 日本吉

n i p p o n - k i c h i

<http://nippon-kichi.jp/>

Linkclub

to the future, produced by KAI

### 自薦他薦無料サイトです!

「日本吉」は、日本人がデザインしたもの、日本でつくられたもの、日本の文化が生きているものなど日本の美意識が表現されているものであれば、自薦他薦を問わずどなたでも記事や画像を無料で投稿できます。

### 日本の美を世界へ発信します!

日本の美を世界に同時発信するために、英語による表示切替を設置しました。これによって世界中の人々に日本文化や美意識を紹介することができます。

### マジックガーデンと結びついています!

マジックガーデンに出店中のショップで日本の美意識が表現されている商品は、日本吉からショップにリンクを張ることができます。その場合、マジックガーデンのロゴが表示されます。

日本の美意識で綴る **自薦他薦** **無料サイト**

日本吉は、あらゆる日本の美意識を  
Webサイトの中に集め、その豊かさを共有し、  
世界に発信していきます。